

野猪と組討ち狙討ち

川口孫治郎

町から僅に三里許、三里といへば世界を跨ぎにかくる勢からは何んでもない距離ではあるが、併しその三里は鳥も通ふにも苦む峻い山坂である、之を登つて下れば即ち我輩の第一の故郷である、まづの山中である、日夕見聞するも唯山と林と時々鈴のやうに響く小鳥の聲ばかりである。大昔からの木の國のその又大奥である。獨乙の文明は深林の中から出たといふが、それが真なら吾輩の如きも木の國の大深林中の産、少くとも日本の文明にはなど、といひたくなるとか、ならぬとか、そんなことはどうでも構はぬ。我輩は大に威張つても矢張り純然たるキナカツポーである。

田舎ッポーの經驗は何時も粗末で、都人士の前では實以て參酌すべきところ多からうとの忠告もあつたが、それを參酌するまでにハイカル元氣が

未だ足りない、有りのまゝに述べませう、述ぶるといつたいは、野猪と組討ち及び狙討ちの實驗談です、忘れもせじ、師走十八日の朝まだき、林も森も霜でボロ／＼に白くなつて居る。谷川の水の音がサラ／＼と林を縫うてゆれてくる。落葉を踏んで帯のやうに細長い山田の端に降りて行く脚下がプリ／＼音がする。ヒドイ霜柱であつた。そこに路の片方からバサ／＼と音がして野薔薇や空木や狗黄楊などがもつれて叢生して居る間を押分けて、ヌツと出て來たのが、誠に不恰好な五十八瓏砲彈のや、なもので、而して其突端が此方を向いてグツグツと呻めきながらやつて來る。……諸君……敵意なき又敵すべき戦鬪力の至くなき一匹の野兎にですら眞正面に我方向に突進して來られては、慣れない人々は覺えず道を避くるが自然の人情である。況して此時の相手は犬よりも圓太い。味方四邊に自身一人、一入敵が大きく映じた有体にいへは何だか心地が異様であつた。その奴平氣で吾

輩の方向に接近してゐる、其容子を落付いて視ると誠にオカシゲな顔付だが何處にか確にアドケないところがある、全く野猪の尋常一年生である。野猪の噂は度々聞いてはゐたが、實際に動いて來るのに面會したが此時が始めてであつた。小供だといふ當がつくと、此方は當年とつて十有六歳の蠻力發露の腕白盛り彼の正面からカブリ付いた、一呼吸に押潰さうといふのが此方の抱負。頭から押付けられた彼は嫌つてギアアと太い胴体に似合はぬ細い聲を出す、それが押へて居る我輩の腹の中まで響いた、異様な感じに力ゆるみしものか彼は被つたまゝで前進し始めた。之ではたまらぬと逸早く彼の兩前足を力任せに彼の胸に抱き付けた、之でやつと膝射の姿勢にまで捻付けた。一息つかんとする刹那彼は再び立射の構へに起きなほつて又前進を始めた。我輩も斯くなつては騎虎ならぬ騎猪の勢、仁田四郎ならば刃物を持つて居つたが吾輩は赤手でゐる。此處空前の奮闘といふところ。

我は押潰さう、彼は擔いで行かう、双方之より外に何の手も出ない、人間の子供と猪の子供との組討塵つた揉んだの果は、吾輩終生の憾み、負けたではないが、敵は一步一步に吾輩を擔いてニチリ進む、到頭、その山田の縁の數百尋の斷崖のところにやつて來た。斯ういふ時になると分別なかりし吾輩より猪の方が一層分別のないことに秀で、居る。平氣で我輩をかついたまゝで其斷崖を飛下らむ勢。吾輩も飽くまで負けぬ氣で戦つてゐたが少し氣がせけて來た、實は吾輩にして最初若し彼の尻尾の方から押潰しにかゝつて居つたならば、此な場合になつても大体の梶をとつて自身丈の身の振が勝手に出來たらうが、慙じいに猪の首の動かぬことと従つて容易に噛み付けないことを知つて居つたものだから、頭の方からかぶりついて潰さうとしたのが抑の失敗、殘念ながら今や彼に倒に擔がれて我兩脚は地を少し離れて彼の頭の兩側から引摺つて居るのだから、此場合何とも致方

がない。

さうからする中、早や絶壁の角から我一脚がブラ下つた、正面しての「巖頭の感」は後年所華嚴の瀧に於て見たが、之に先つ十幾年足からつき出される巖頭の感は吾輩の實際に於てあまり心地よきものに非ざること丈は明言出来る。イヤ冗談どころでない。實に冷りつとした。のるかそるかの一轉瞬、渾身の力をこめて機械体操の木馬飛び越し流に、猪の背中に兩手を突いて、ウント彼の尻尾の方即ち安全界に飛び越すや否や、瞬もくれむ向き直つて彼の尻尾を驚擾みにして第二の一呼吸に我ながら氣合の單つた全力に、エイとばかりに、其の猪を崖下目蒐けて思ひさま突き落してやつ。

吾輩は敢て好んでこんな手暴いことをしたのでない、實に止むを得なかつたのである。崖下は多分岩角ばかりで、猪の子、鼻の先でもイヤといふほど打つて仆れて居るだらう。わゝ可愛さうなことをした、といふ感も起つた。それに續いて既に

仆れたとすれば何と歎いても追付かない、イヤはんにそれを持つて歸れば自分の力自慢の實證にもなるわけだと忽ち起る凡夫の淺ましき誠に申すもはづかしい次第であるが、當時の實際の感想は左様であつた。

さらばと絶壁の左の方、杉林の中程まで下つて手頃の幹を握つて半身を差出し、下界の様子如何に瞰した。ヒドイことになつて居る。下は幸か不幸か岩ではなくて同じ山田の沼であつた。染物屋の藍壺が尻餅をついたやうな穴が開いて居つた、而かも其開けた主人公が居ない。察するところ猪君眞頂から沼田の泥中へはまつたと見ゆる。そしてドウしたもののか之を外づれて終つたらしい。あきれ返つて不圖見ると早や十七八間も向ふの復た他の絶壁の縁を平氣で歩いて居るのは例の奴さんであつた。

斯うなつてみると、凡夫は更に淺ましいものである。矢張ブツ殺してやつた方がよかつたのに、

などと愚痴が内心に沸いたが、命を知るものは巖
 壁の下に立たずだ、過つては改むるに憚ることな
 かれ、千金の子は猪の子に死せずだ、など瘡我慢
 に果敢ない氣休めをして、家に歸つたが、内心で
 は齒痒ゆくて／＼ならない、猪の尋常一年生なん
 かに負けたなどと自分獨りて内心で緑言をして居
 つた。

衣物に泥が着いて居る、膝頭に擦過傷がある、胸
 や腕には粗い猪毛でコスツた眞紅な條がついて居
 る。到頭發見せられて問ひ詰られて詮方なしに有
 りし次第を語つて、空前絶後の御目玉を八方から
 頂戴した。

一体。野猪といふ奴は誠に蠻力の強い獸で、隨
 分太い樹の幹でもガリ／＼噛り傷す、さうかと思
 へば秋末に山田の稻穂を吸ひに来て一茎／＼に吸
 ひ廻つて一夜の中に恐ろしい面積を荒して終ふ。
 之に野猿も手傳いに來て百姓共の半歳の辛苦を一
 夕にして盡すといふワルサをする。それで百姓共

は彼等の厭がる芒の多い種を育てるゝになつて居
 るが、併し腹がすいては野猪の眼中には芒も何に
 もあつたものでない。芒なりに皆やつて終う。近
 頃は彼等の驅逐の一法として石油の罐を竿の端に
 吊つて之を山田の岸に立て風のまに／＼終夜ガラ
 ン／＼やらせて居る。これも慣れては恐なくなる。
 唯彼等は火の光を恐るゝことが甚しいので、今
 も耗散を焼いて最も有効に防がれて居る。稻の收
 獲が終れば彼等は早や焚火の恐しさもなくなつて
 得意になつて出で來つてあの大きな形態をして小
 さな蚯蚓を食ふ爲に、あの不恰好な鼻先で稻の菊
 跡を犁で鋤いたやうに割りかへし縦横無盡に掘り
 かへし夜の明け方に素早く隠れてしまふ。

それで百姓は唯一枚の折角の稻田を滅茶々々に
 された意趣として何時も鐵砲を取出すのである。
 勿論、討ち取つても皮は粗末なもの、そのまゝ山
 野跋涉の沓にする。野猪の大さを呼ぶに何足と數
 を上げていふのは全く其全皮より製し得べき沓の

足敷から来たのである、大六足といふのが最も大なるもので、近頃の長靴位なるのを六足即ち十二個分位とれる奴である、製革しても上等品にはならぬ、鹿の鹿のそれには及ばぬやつとのことで、獵師の穿いて居るアノ義經袴、も少しわかり易くいへば新式の何とかいふ体操服の袴のやうなもの、材料にする位である。肉は上等とはいへぬが皮に於て鹿に劣る丈に此方では鹿より遙によい。兩國橋を渡で一才右へとつて折るゝと、一軒の肉屋があるそこに「山鯨」とかいて此野猪が吊されて居る。山鯨といふ名の付け方が面白い、「し」といへば人がイヤがる、「猪食つた報ひ」など、脂肪の多い丈に兎もすれば後に報があるなど、賤しいたとへに引かるゝ風習があるから、名を諱んだところが趣がある。併し山奥では東京よりは今一步進んで鹿の肉を紅葉といひ猪の肉を牡丹と呼んで居る。實際は山家では食へぬ、却て町や市の好事家に賞味せらるゝが多い。肉と皮とを外にしては他にあま

りこれといふほどの有用のものがない、之を討取るには随分骨である、併し専門家には相應に道がある。

野猪は生來犬が大嫌である、それで獵師は必ず二三匹の犬をつれて行つて獵り立てるのである、犬どもは其鼻で野猪の往來する道筋をつきとめて之を傳うて行くと、大抵は絶壁の上の絶壁の下、わかり易くいへば絶壁の中段で、人跡のつかないところに大將猪君が横はつて居る、彼の臥床に名に負ふ「臥猪の床」といつて、彼はズー体の大きな割に、蚊を恐るゝことが非常なもので、寒中の外は草を被つて行儀よく休むのである。朝はのゝからイヤに犬等が間近く攻寄せて吠えたりウルサイ、安眠を妨害するなど怒鳴りつくと犬の方から妨害を安眠するなど吠へかへす。ナニツト身を起せば犬どもは颯とひらく、そこで再び横になれば犬ども益侵入してくる、山の彼方より折々「行ケツ」といふ尖つた聲が反響する、所

謂猪の耳に獵夫聲「あまりイ、心持もしなくなる
 そこで到頭猪君突出すことになる。既に起つた以上、前刻から自分の臥床を遠巻にグル／＼駈け廻つて居る犬を目がけて之を逃げ出しの駄賃とやらに投げ飛ばして獵師共には後を見せず奔竄して終う、其際開き損じた犬は彼の鼻にかゝつて投飛されて果つることは往々あるが、併し太抵は犬もさるもの電光石火猪の突貫をかはずことが頗る巧妙である。既に遣けたら早速猪の跡をつけて勇往邁進するから、犬に蹤かれては猪も實は聊か迷惑である、獵師は折々報告する犬の吠へによつて犬を激勵しながら猪の進む方向に心して居る、自分の方向に獲物が来ると承知した他の獵師は沈着に耳をすまして居る、其時「左の追へ廻つたぞ」といふ遠方から鋭い警報が聞ゆる、頓て再び「右の尾に向いたぞ」と聞ゆる扱ては己の定地位に向いたかと、斯く不工合になると冷然として銃を腰にする、近頃の銃獵家のホヤ／＼などは左の眼

を閉ぢ損じて右の眼を蔽して照準とやらをとつて射撃することもあるさうだが、吾輩どもの射撃は「腰ダメ」といつて銃身の元半分迄を腰に添へて、縦横自在敵の來る方向のまに／＼應戦する流である、獵師は斯うして待つて、矢頭をはかつて一發でやつけてしまふ。

萬一射損ずるか或は其一發に致命しなかつたかの際には、凄くなる。彈丸が彼の躰内に留つて頓がて發熱する。擦過傷でも氣分がよくないものを況して旨管銃創になると狂ひがくる、所謂手負猪になる、やぶれかぶれの鼻當り次第、人をも物をも皆敵と見做し荒れに荒れて鼻息荒く牙を鳴して突進してくる、深窓に育つた方々には眞正面に見ることの出来ぬ凄まじさである、が靜かに心を空うして熟視すれば一種の壯嚴の感じにうたる、獵師の之に對するは如何にも危いことは危いが、危いの之に趣味の深いところもある、敵が勢猛くなる丈それ丈此方は反比例に冷靜になつて之に對するの

である、岩も砕けと突貫して来た其間一髪、ヒラリと躰をかはして、第二回の突貫の盛返しを待つのである、第一回の突撃に射撃しないのには理由がある。あまりにヒドイ突貫だから、七八間前で射留て夫で氣息が絶えても尚ほ素敵な情力で數十貫の躰が彈丸の如き速度で射手のところまで眞直に飛んで来る、之が爲に生きた猪を討殺して其死んだ猪に押潰されて落命した獵師が少くなかつた苦い經驗があるのが理由の一つ。今一つは颯とかはした刹那に靜に手負の場所なり程度なり觀察する、敵は名に負う猪武者が外づされて七八間も行き過ぎて、やつと廻らぬ首を廻らし再度の突貫に立直つたまで此方は己の足場と敵の射頭とを定めて、イザや來れと待ち構へる、猪にとりては最後の一發を頂戴すべき此方の準備の爲が理由の第二である、斯く落付かれては百發百中、殆んど銃の先を嚙らるゝまで冷眼に所謂腰狙に構へるのである。誠にキワドイやり方であるが、第二回

の早速の突撃は情力がついて居ないし、殊に突き上りであるから第一回の突下のやうな勢がなくて安々銃先にかゝつてしまふ。

其銃器といつても決して連發でも又必しも元込單發でもない。未込のスナイドルも及ばぬ、唯の火繩銃で十分である、一發やれば殆んど最期なる丈に彼等の發射の慎重なもの推はからるゝ。而も突撃一度を外して其次回を受ける迄に完全に莖填を了する敏捷と沈着とは吾輩も頭が上らない。

尤も萬一獵師がやられた場合には誠に仕末にない代物である。往年金谷といふ里へ其吻外に長く反り出して恐ろしく後方に曲つた白き牙を鳴らし蝸の如き黒褐の粗毛を全身に逆立て地響さして躍り出た、アレヨ〜と人々の逃げ迷ふのみで手出すものは一人もなかつた、折柄巡回中の巡查部長は職掌柄抜劍して喰止めやうとしたが忽ちやられて終つた、部長がやられたと聞いて土地の俠客が「己れ」と出懸たが之亦思ひ切つて投げ

られた狂猪は遂に勢に乗して谷川の渡頭まで狂奔して来て、其處で踏み外づしたのが彼の運の盡きドバンと落ち込んで白泡を立つと同様にブー／＼怒號しながら泳ぎ出した山の王は川に入つては一卒にも及ばぬ、此瞬間に夫れ一人々手に手に得物を携えて、浮きつ沈みつ半ば流れ行く彼を包圍攻撃して、やつと退治してしまつたことがあつた。

何事も知らぬが佛、人生文字を知るは苦しみの基など愚なことはいはるゝが、時には知らない爲に却てさまざまの経験もするものかな。ニーチェの所謂「成功に達するまでは數多のはづかしさを忍ばねばならぬ」といふこともつく／＼思ひ合さる。併し野猪なども組討を致すものにあまり賢いものがない、吾輩も一度やつて以後は絶然やらないと決心した。



色の話

藤五代策

凡の物体は形と色との二つから成り立つて居る其の形は本體で色は艶である形はよく整ふても色の之に調和せぬときは美觀を呈せぬのである今左に色に就きてお話し申しませう

色は之を細分すれば學者の話に二三万種からあるさうですニュートン氏は太陽の光線は七色であることを證明せられて世界の凡ての色は皆此の七色から様々に調合して出來たのであると説かれた其の七色とは赤。黄。青。橙。紫。緑。紺のことである彼の虹は正しく此の七色を見はしてをる吾々が晴天に外に出て淡黒き壁に添ふて霧水を吹くときは明に太陽の光線の七色を認めることが出来る其他三稜鏡と云ふ器械にて太陽の光線を分折すれば尙一層明かに七色を認められるのである今此の七色を一定の順序と分量に由て平面圓板に塗色し之